

芥川龍之介「藪の中」論 —— 竹に隠された秘密 ——

An Essay on Ryunosuke Akutagawa's "In the Woods": Secret of the bamboo-grove

日置俊次

Shunji HIOKI

1

この論考は芥川龍之介「藪の中」(新潮)大正11・1)を、「竹」という視点から分析しようとする試みである。

「藪の中」が『今昔物語集』の巻二十九第二十三「具妻行丹波国男於大江山被縛語」を基にして成り立っていることは定説である。もちろんそのほかにも多くの先行する文学作品による影響が指摘されているが、小説の骨格はこの巻二十九第二十三話にあることは間違いない。¹⁾

1

ここで芥川が参照したといわれる池田義象等校註『校註 國文叢書』第十七冊「今昔物語」下(博文館、大正4・8)に拠りつつ、「具妻行丹波国男於大江山被縛語第廿三」の全文を引用する。なお部分的に読み仮名をカッコに入れて示すなど、本文に編集を加えて

いる。

今は昔、京に有ける男の、妻は丹波の国の者にて有ければ、男其の妻を具して丹波の国へ行けるに、妻をば馬に乗せて、夫は竹蠶簿(えびら)箭十許差たるを掻負て、弓打持て後に立て行ける程に、大江山の辺に若き男の太刀許を帯(はき)たるが、糸強気なる行烈、然れば、相具して行くに、互に物語などして主は何(いづこ)へぞなど語ひ行く程に、此の今行烈たる太刀帯たる男の云く、「己が此の帯たる太刀は陸奥の国より伝へ得たる高名の太刀也。此れ見給へ」とて抜て見すれば、実に微妙き太刀にて有り、本の男此れを見て欲(ほし)き事限無し。今の男、其の気色を見て、「此の太刀、要に御せば、其の持給へる弓に被替(かへられ)よ」と云ければ、此の弓持たる男、持たる弓は然までの物にも非ず、彼の太刀は実に吉き太刀にて有

ければ、太刀の欲かりけるに合せて、極たる所得してむずと思て、左右無く差替てけり、然て行く程に、此の今の男の云く、「己が弓の限り持たるに、人目も可咲し。山の間の箭二筋被借よ。其の御為も此く御共に行けば同事には非ずや」と、本の男此れを聞くに、現にと思ふに合せて、吉き太刀を弊（あし）き弓に替つるが喜さに、云ま、に箭二筋を抜て取せつ、然れば弓持て箭二筋を手箭に持て後りに立て行く、本の男は竹蠶簿の限を搔負て、太刀引帶てぞ行ける、而る間昼の養せむとて藪の中に入るを、今の男人近には見苦し、今少し入てこそと云ければ深く入にけり。然て女を馬より抱き下しなど為る程に、此の弓持の男、俄に弓に箭番て本の男に差宛て強く引て、「己れ動かば射殺してむ」と云へば、本の男更に此れは不心懸ざりつる程に、此くすれば物も不思えで只向ひ居たり、其の時に山の奥へ罷入れ入れと恐せば、命の惜きま、に妻をも具して、七八町許山の奥へ入ぬ、然て太刀投よと制命（いさめおほ）すれば、皆投て居れるを寄て取て、打伏せて馬の指繩を以て木に強く縛り付けてつ、然て女の許に寄来て見るに、年廿余許の女の下衆なれども愛敬付て糸清氣也、男此れを見るに心移にければ、更に他の事も不思えで、女の衣を解けば、女可辞得き様無ければ云ふに随て衣を解つ、然れば男も著物を脱て女を搔臥せて二人臥す、女云ふ甲斐無く男の云ふに随て、本の男被縛付て見けむに、何許思けむ、其の後男起上て本の如く物打著て、竹蠶簿搔

負て太刀を取て引き帶て、弓打持て其馬に這乗て女に云く、「糸惜とは思へども、何為き様無き事なれば去ぬる也、亦其に男をば免して不殺なりぬるぞ、馬をば疾く逃なむが為に乘て行ぬるぞ」と云て、馳散して行にければ、行にけむ方を不知ざりける、其の後女寄て男をば解免してければ、男我れにも非ぬ顔つきして有ければ、女「汝が心云ふ甲斐無し、今日より後も此の心にては更に墓々しき事不有じ」と云ければ、夫更に云ふことなくして、其よりなむ具して丹波に行にける、今の男の心糸恥かし、男女の著物を不奪取ざりける、本の男の心糸墓無し、山中にて人目も不知ぬ男に弓箭を取せけむ事実に愚也、其の男遂に聞えで止にけりとなむ、語り伝へたとや。

以上が話の全文である。さて、確認のために、この物語の中心となる部分だけ、おおまかに現代語訳してみよう。⁽³⁾

しばらく連れだつて歩きながらお互いに話をし、どちらに行かれますか、などと親しく語りあいながら歩いていくと、この道連れになった太刀を佩いた男が、自分が佩いているこの太刀は、陸奥の国より伝わってきた名高い太刀である、見給え、と言いながら、太刀を抜いたのを見ると、実にすばらしい太刀だったので、始めの男は、どうしてもその太刀が欲しくてしかたがない。若い男は、その様子を見て、この太刀が必要でしたらお持ちの弓と交換しましょう、と言った。弓を持った男は、持っている弓はたいしたものではなく、あの太刀は実にすばら

しいものなので、太刀が手に入る上にひと儲けができるとも思
い、ためらわず交換した。しばらく行ったところで、若い男が
言うには、弓しか持っていないのは人目にもおかしい、山を歩
いている間、その矢を二本ほど貸してください、ご一緒するの
ですから、私がお持ちしても同じことでしょう、と。男は、こ
れを聞いて、いかにも思い、また、良い太刀をみすばらしい
弓と交換したのうかれて、言われるがままに矢を二本抜いて
渡した。そして、若い男は、弓と矢二本を手を持ち、後ろから
ついて行く。はじめの男は、籠を背負い、太刀を帯びて歩いて
いった。

やがて、昼食を食べようと藪の中に入ったところ、若い男は、
人通りに近いところはみつともない、もう少し奥に入りましょ
う、と言ったので、さらに奥に入り込んだ。そして、女を馬よ
り抱き下ろしたりしていると、この弓を持った男は、いきなり
弓に矢をつがい、男にねらいを定め、強く引き絞り、ためえ、
動いたら射殺すぞ、と言ったので、始めの男は、全く思いがけ
ないことだったので、どうしてよいかわからず、立ちすくんだ
ままだった。そのとき、もつと山の奥へ入れ、と脅され、命を
惜しみ妻と一緒に七八町ほど山の奥に入った。そして、太刀を
捨てると命じられて、すべて投げ捨てたので、若い男は、太刀
も短刀を取り上げ、男を押さえつけ、馬の手綱で木にきつく縛
り付けた。そして、女に近寄って見ると、二十歳過ぎで、身分

は賤しいけれど魅力的でたいそう美しかった。男は、女に心を
奪われ、ほかに何も考えられなくなったので、女の衣を脱がそ
うとすると、女は拒むことができそうにないと思い、言われる
がままに衣を脱いだ。そして、男も着物を脱ぎ、女を押し倒し
て交わった。女はしかたがなく、若い男に言われるがままにし
たがったが、縛り付けられた男はそれを見てどのように思った
のだろうか。

この犯罪の現場は大江山あたりである。しかし、犯罪が行われた
場所がどのような空間か、具体的な記述がほとんどない。「昼の養
(やしなひ) せむとて藪の中に入る」というところに、「藪の中」と
いう言葉が一度だけ登場しているが、ほかに「藪」という言葉が現
れることはない。そしてこの「藪」がどんな藪なのか、不明である
とにかく山の奥へ入るといふあいまいな感覚で、藪の中に行くと言
現している。竹藪であるのか、ほかの種類の樹木なのか、分からな
い。馬が入れるのであれば、そこは竹藪ではないし、藪の中で、若
い男は夫を木に縛っている（「木に強く縛り付けて」）。木がある
ということ、少なくとも竹のみの竹藪ではない。雑木林のような
荒れた森林であったと思われるが、もちろん縛り付けた木は何の木
であるのかはわからない。

芥川は、往来から外れた異空間といってもよいこの曖昧な空間を、
小説の中では具体的に竹の藪として指定した。竹を持ち出したのは
芥川の考えによる。厳密にいえば、事件は竹藪を抜けたところの空

き地、あるいは中庭のような場所で生じる。芥川によれば、男を縛り付けた木は杉の木と指定されている。そこは通りから見ると竹藪の向こう側である。藪の中だと言えなくもないが、しかし竹藪の内部ではない。杉の木のまわりには、太刀を交わして決闘ができる空き地が存在する。死体が見つかったのはそこであり、竹藪の内部の足の踏み場もないような竹の間にあったわけではない。芥川は「杉むら」という言葉を用いており、「杉むら」も含めて藪だといったいのかも知れない。いずれにせよ、木樵りが木を切りに来る場所であり、竹藪の中ではなく、やや開けた空間であったはずである。

原典には竹蠶簿（たけえびら）という、竹でできた矢入れが登場している。しかし、これは道具であって、現代語訳ではその「竹」の文字も消えてしまうほどであり、ほとんど意味はない。いずれにせよ生きた竹は一度も登場しない。巻二十九の第二話、第十九話、第二十二話、第二十九話、また巻二十六の第十八話もこの小説に影響を与えているといわれるが、いずれにも「竹」は登場しない。

藪を、よくわからない藪のままにしておけば、その曖昧さを残したまま、事件は藪の中で起こったのだという。あたり一帯がよくわからない木々の茂った藪であり、すべては藪の中の出来事だといっておけば、違和感はない。しかし、それを「竹藪」とはつきり設定して、竹藪を抜けた杉の木のある空間で事件が起こったというやや奇妙な整理を、芥川はあえて行っている。「何しろ馬の通ふ路とは、藪一つ隔たつて居りますから」と木樵りが言うニュアンスを

かぎ取れば、舞台がやぶの「中」ではないことははっきりわかる。このとき「藪の中」といえば「竹藪の中」という意味になり、事件の内実と小説のタイトルの間に、微妙なずれが生じる。もしこの小説が「竹藪の中」というタイトルであったとすればどうであろうか。イメージがはっきりしすぎて、おそらく作品の魅力は半減する^③。

それにもかかわらず、なぜ芥川は具体的な「竹」を持ち出したのであろうか。芥川は「竹」を描いたものの、「竹藪」という表現は一度も用いていない。しかし作中ではくどいほど、この竹の存在が強調されるので、読者は「竹藪」を思い浮かべる。本論考は、このように「藪の中」に原典にはない竹が登場しなければならなかった理由を、当時の芥川の心理に寄り添いながら明らかにする試みである。

研究史的には、この作品は殺人事件に関する真相が存在するのか、あるいは真相が不在なのかという点が論争の一つの焦点となってきた。剛直でまっすぐであると同時に、やわらかくしなる竹には、光と闇の両面のイメージがあり、また両性具有性があり、聖と俗の両面が見られる。その竹の輻輳的なイメージに柳田國男のいう「妹の力」のようなものを感じ、恐れ、また惹かれていた芥川の心の葛藤が、この作品には反映されているのではあるまいか。不可解な「女の力」の深層にあるものは、男性である自分にはついに突き止められないが、わからないままにしておくよりほかに謎であるという認識が、「藪の中」の主題となつていられると思われる。それは実はか

つて失恋に苦しみながら「羅生門」を書いた時から、芥川をとらえて放さなかった謎なのである。その謎を許容し、あるいは肯定するごとき態度が、「藪の中」には見られるのではないか。

2

「藪」とは「低木や草、竹などが生い茂る場所」である。高い木が並んでいるならそれは林や森になる。杉の木が並んでいても藪とはいえない。「藪」には乱雑な悪いイメージがある。⁽⁴⁾「藪から棒」は予期できなかったことが起きたり、物事のやり方が出し抜けであることである。「藪蛇」は、余計な真似をしてかえって災難に会うことである。ともに良い意味には使わない。「竹藪に矢を射るよう」というのは、無益でむだなことのたとえである。「藪」にはごちゃごちゃして見通しがきかないという語感がある。⁽⁵⁾もしそれが竹である場合は、手入れされ管理されているのが「竹林」であり、放置されたまま密集繁殖して入ることも難しい竹むら⁽⁶⁾が「竹藪」として区別されている。そこで切り合いはできない。

こうした前提を踏まえううえで、芥川の小説に沿って、芥川が描いた「竹」を確認していこう。まず、「検非違使に問はれたる木樵りの物語」を見てみよう。

すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございます。あつた所でございますか？ それは山科の駅路からは、四五町

程隔たつて居りませう。竹の中に瘦せ杉の交つた、人氣のない所でございます。(中略) 死骸のまはりの竹の落葉は、蘇芳に滲みたやうでございます。

こうした「木樵りの物語」などは、もちろん原典には登場しない。芥川の創作である。木樵(きこり)、あるいは樵夫(しょうふ)というのは、森林の樹木を斧などで伐採して生計を立てる者である。燃料の薪を伐りだすこともあり、木材として利用する場合もある。竹を切るものを木樵りとは言わない。ここで、「竹の中」「竹の落葉」という表現から、「山陰の藪」が竹藪であることがわかる。しかし、小説全編を通して、「竹藪」という言葉は慎重に避けられている。⁽⁷⁾

次に「多襄丸の白状」を見てみよう。

藪は少時の間は竹ばかりです。が、半町程行つた所に、やや開いた杉むらがあつた、——わたしは仕事を仕遂ぐるのには、これ程都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、宝は杉の下に埋めてあると、尤もらしい嘘をつきました。男はわたしにさう云はれると、もう痩せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本も杉が竝んでゐる、——わたしは其処へ来るが早い、いきなり相手を組み伏せました。(中略) 勿論声を出させない為にも、竹の落葉を煩張らせれば、外に面倒はありません。

道から入ると最初に竹藪がある。しばらく竹藪が続く。そこを越えると開けた場所があり、大きくない杉が何本も生えている。竹藪

の中に杉林がある状況は考えにくい。竹は地下茎を伸ばして大変な勢いで増える。何百本の竹があっても一つの個体である。生命力が強く、密生した竹林では林床に日が射さないので他の植物は生えることが出来ない。ピーク時には竹は一日で一メートルも成長するので、既存の林に進入して占拠してしまうことも多い。彼は男を縛って「竹の落葉を頬張ら」せたというが、このほかに落ち葉はなかったということであろうか。ここで事件の直後の述懐を見てみよう。

すると、——どうです、あの女は何処にもゐないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も残ってゐません。又耳を澄ませて見ても、聞えるのは唯男の喉に、断末魔の音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶ為に、藪をくぐって逃げたのかも知れない。

舞台設定によると、杉の木々と、藪とは分けて描写されている。

杉の木の周りには太刀打ちをする空間があり、二十回以上切り結ぶような激しい戦いをする余地がある。男を殺して、気が付くと、杉の木あたりに女はいない。女は竹藪をくぐって逃げたのではないかと多襄丸は考える。とにかく女は竹の落ち葉の上から消えてしまっていた。この「竹の落葉」という言葉は原典の『今昔物語集』には出てこないが、「藪の中」には頻出するので、その理由を考えておく必要がある。

黒澤明監督の「羅生門」で描かれたドラマの舞台を見ると、犯罪の現場は、かなり開けた場所である。その空間は藪とはいいたくない。映画の題名が「藪の中」ではない理由の一端がそこにあるのではないだろうか。

映画を見れば、舞台はどうこじつけても藪の中ではない。読者が作品「藪の中」を注意深く読めば、やはり舞台は藪そのものではなくて、木々に囲まれている小広場のような場所だと考えるはずである。

多襄丸によれば、若妻である眞砂の牟子の垂絹が風でめくれてしまい、その顔が見える。その一瞬見えた顔に恋するように、多襄丸は「その咄嗟の間に、たとひ男は殺しても、女は奪はうと決心」するのである。これではまるで『源氏物語』の「若菜上」で、猫をつないでいた紐が絡まって御簾（みす）が引き上げられ、室内にいた女三の宮が柏木に姿を見られてしまうドラマのようである。しかし「わたしにはあの女の顔が、女菩薩のやうに見えたのです」と多襄丸は言う。多襄丸はそのうち、この女菩薩の底知れぬ強さや、嘘や残酷さに出会うことになっていく。

原典では、盗賊の前にして女は素直に衣服を脱ぐ。しかし芥川が描く眞砂は気が強く、小刀を振り回すなどの抵抗を重ねる。芥川はこの眞砂に「萩重ね」の着物を着せているが、萩の強靱でしなやかな性格がよく出ている。次に「清水寺に来れる女の懺悔」から、この人妻の証言を確認してみよう。

跡には唯杉の根がたに、夫が縛られてゐるだけです。わたし

は竹の落葉の上に、やつと體を起したなり、夫の顔を見守りました。(中略)

やつとあたりを見まはした時には、夫はもう縛られた儘、とうに息が絶えてゐました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交つた杉むらの空から、西日が一すぢ落ちてゐるのです。

この部分でも、女は「竹の落葉」の上になつてゐる。

芥川が「竹と杉の混ざつた藪」を想定していた可能性ももちろんあるが、やはり竹が主役だという発想が見られるのである。それでも読者にはあいまいさが残るだろう。西日が射すということは、ある程度の開放性が見られる。竹藪が切れたところで、いったん「藪」は終わつてゐると思つてよい。それは「巫女の口を借りたる死霊の物語」で、殺された男が語つてゐる内容でも確認できる⁽⁸⁾。

唯杉や竹の杪(うら)に、寂しい日影が漂つてゐる。日影が、——それも次第に薄れて来る。

この文章に登場する「杪」という漢字は普通ビヨウ、ショウ、こずえと読む。細い梢、枝の先という意味である。「日影」とは太陽の光のことである。杉や竹の細い枝の先に、日光が漂つてゐる。そして日が沈みかけてゐる。その空間は植物に囲まれてゐるが、それほど暗い場所であるとは思われない。いづれにしても原典では問題にならなかつた「藪」が、芥川の手によつてかなり揺れをはらんだ複雑な空間に変容してしまつてゐる。なぜこのようなことがなされたのであろうか。「藪の中」というタイトルを設定している以上、

芥川はこの「藪」をしつかり描こうとしたのかもしれない。しかし、ブラックホールのな存在として「藪」を曖昧なまま残しておくこともできたはずである。芥川が導入したのは主に「竹」という要素であるが、それでは芥川にとつて「竹藪」とはどのような意味を持つていたのであろうか。そして繰り返される「竹の落葉」の意味は、何なのだろうか。

3

芥川の「本所両国」は、昭和二年五、六月に「東京日日新聞」紙上に掲載された文章である。その中に、「お竹倉」の地名が何度も登場する。「大溝」の章を引くが、「お竹倉」はこの「おほどぶ」という名前と対になつており、幼時の記憶に刻み付けられていることがわかる。

殊に僕の住んでゐたのは「お竹倉」に近い小泉町である。「お竹倉」は僕の中学時代にもう両国停車場や陸軍被服廠に変つてしまつた。しかし僕の小学時代にはまだ「大溝」に囲まれた、雑木林や竹藪の多い封建時代の「お竹倉」だつた。

続いて同じ文章から、「お竹倉」という章を見てみよう。

そこは前にも言つたやうに雑木林や竹藪のある、町中には珍らしい野原だつた。のみならず古い橋のかかつた掘割りさへ大川に通じてゐた。僕は時々空氣銃を肩にし、その竹藪や雑木林

の中に半日を暮らしたものである。

その名の通り「お竹倉」は、基本的に竹藪なのである。隣に雑木林がある。芥川は、この「お竹倉」の竹藪を想起しながら、「藪の中」を書いた可能性がある。次に「大導寺信輔の半生——或精神的風景画——」（中央公論）大正14・1）から引用しておこう。⁽⁹⁾

大導寺信輔の生まれたのは本所の回向院の近所だった。（中略）おまけに又その道の突き当りはお竹倉の大溝だった。南京藻の浮かんだ大溝はいつも悪臭を放つてゐた。彼は勿論かう言ふ町々に憂鬱を感じずにはゐられなかつた。しかし又、本所以外の町々は更に彼には不快だった。しもた家の多い山の手を始め小綺麗な商店の軒を並べた、江戸伝来の下町も何か彼を圧迫した。彼は本郷や日本橋よりも寧ろ寂しい本所を——回向院を、駒止め橋を、横網を、割り下水を、榛の木馬場を、お竹倉の大溝を愛した。それは或は愛よりも憐みに近いものだつたかも知れない。が、憐みだつたにもせよ、三十年後の今日さへ時々彼の夢に入るものは未だにそれ等の場所ばかりである……………

本所の泥濘の絶えたことのない道や、南京藻が浮かんで悪臭を放つ「おぼどぶ」が芥川の記憶に残っている。芥川は「お竹倉」という場所を愛し、憐れみ、またどこかで軽侮してもいたのではないだろうか。「少年」（中央公論）大正13・4・5）の第二章「道の上の秘密」にはこんな記述がある。

保吉の四歳の時である。彼は鶴と云ふ女中と一しよに大溝の

往来へ通りかかった。黒ぐろと湛へた大溝の向うは後に両国の停車場になつた、名高い御竹倉の竹藪である。本所七不思議の一つに当る狸の莫迦囃子と云ふものはこの藪の中から聞えるらしい。少くとも保吉は誰に聞いたのか、狸の莫迦囃子の聞えるのは勿論、おいてき堀や片葉の葎も御竹倉にあるものと確信していた。が、今はこの気味の悪い藪も狸などどこかへ逐ひ払つたやうに、日の光の澄んだ風の中に黄ばんだ竹の秀をそよがせてゐる。

「日の光の澄んだ風の中に黄ばんだ竹の秀をそよがせてゐる」という文章は、あの「竹の杪に、寂しい日影が漂つてゐる」という文章の匂いを思い出させる。本所に江戸時代から伝承される怪談「本所七不思議」のうち、狸の莫迦囃子（囃子の音が聞こえてくるので探すと、音は逃げるように遠ざかり続ける）、おいてき堀（堀で釣りをしてたくさん釣れたが、堀の中から「置いていけ」という恐ろしい声がする。恐怖に駆られて逃げ帰って、魚籠を覗くと、魚が消えている）、片葉の葎（留蔵が美しいお駒に懸想して、お駒の片手片足を切り落として殺した。殺人現場の駒止橋付近に生い茂る葎は、片方だけの葉しか付けない）といった恐ろしい話が、そこにある竹藪を起源としていたように芥川は感じていた。こうした怪しい、不思議な竹藪の感覚が、芥川の内部に深く残っていたと考えられるのである。置いてき堀、または置いてけ堀というのは、江戸時代から伝わる河童伝説である。河童が魚を置いていけというのである。こ

の河童の記憶が、のちに龍之介に「河童」を書かせたと考えられる。そのような意味で、芥川の心の深層にどこまでもおりてゆき、「藪の中」になぜ竹が登場するのかという理由もしつかりと考えなければならぬであろう。

次に、本所両国を離れて、作品が執筆された田端の芥川自宅について考えてみよう。「年末の一日」(「新潮」大正15・1)の中で、芥川は締め切りに追われる日々をすこし自嘲しながら、次のように書いている。

僕はかう言ふ夢の中からたがた言ふ音に目をさました。それは書斎と鍵の手になつた座敷の硝子戸の音らしかった。僕は新年号の仕事で、書斎に寝床をとらせてゐた。三軒の雑誌社に約束した仕事は三篇とも僕には不満足だつた。しかし兎角最後の仕事はけふの夜明け前に片づいてゐた。

寝床の裾の障子には竹の影もちらちら映つてゐた。僕は思ひ切つて起き上り、一まず後架へ小便をしに行つた。

ここには芥川が、書斎で寝ている姿が描かれている。「藪の中」は大正11年の新年号に掲載されている。執筆は前年の年末であり、右に引用した年末の状況とあまり変わらなかつたはずである。書斎の障子に、竹の影がちらつく。書斎は二階にあるが、庭に大きな竹があつたと考えてよい。竹である以上、何本もあつたことが推察される。⁽¹⁰⁾ 年末の締め切りに追われて、余裕のない創作を続ける日々の中で、芥川は竹の影の揺れる空間に幽閉されているような気持を

抱いた状況があつたのではないだろうか。芥川のその家自体が、大きな通りから外れて細い坂道の迷路のような中に存在することで、いわば藪の中にある家と感ぜられたこともあつたかもしれない。⁽¹¹⁾

ここで、当時芥川が住んでいた田端地区の様子に目を向けてみたい。親友の室生犀星は、田端内を転々としている。犀星が現在の北区田端5-5あたりに居を構えたのは、大正十年三月のことである。趣味の庭作りに没頭し、竹を植えたり叡山苔を這わせた。現在、田端の童橋公園には、室生犀星の庭にあつた庭石が保存されている。

昭和三年、芥川の自殺にショックを受けた犀星が大田区馬込へ転居する際に、隣家の広瀬雄へこの庭石を譲り渡した。その後、広瀬雄の子息が公園設置の記念に寄贈したのである。

芥川が「サンデー毎日」に発表した「野人生計の事」には、以下のように描かれている。⁽¹²⁾

室生はまだ陶器の外にも庭を作ることを愛してゐる。石を据ゑたり、竹を植ゑたり、叡山苔を匍はせたり、池を掘つたり、葡萄棚を掛けたり、いろいろ手を入れるのを愛してゐる。それも室生自身の家の室生自身の庭ではない。家賃を払つてゐる借家の庭に入らざる数寄を凝らしてゐるのである。

或夜お茶に呼ばれた僕は室生と何か話してゐた。すると暗い竹むらの蔭に絶えず水のしたたる音がする。室生の庭には池の外に流れなどは一つもある筈はない。僕は不思議に思つたから、「あの音は何だね?」と尋ねて見た。

「ああ、あれか、あれはあすこのつくばひへバケツの水をたらしてあるのだ。そら、あの竹の中へバケツを置いて、バケツの胴へ穴をあけて、その穴へ細い管をさして……」

室生犀星の庭づくりは有名で、庭に関する随筆なども多く、竹を愛していることがわかる。庭づくりには竹が不可欠であるからである。⁽¹³⁾

この犀星の隣人が、これまでも触れている広瀬雄（ひろせたけし）である。広瀬は東京府第三中学校（現・両国高校）の英語科教師を務めており、芥川龍之介の担任となつて以来、熱心に芥川を教育した。のちに学校長となる。芥川の斡旋で田端に引っ越してきた。広瀬は当然、犀星とも付き合ひがあり、彼も園芸が好きである。府立三中から一高へ入学した堀辰雄を犀星に紹介している。広瀬も犀星も金沢出身なのである。⁽¹⁴⁾ 金沢と竹、そうした連想が芥川の内部に生じる可能性がそこにあることは間違いない。

「藪の中」で殺された男の名は、金澤武弘である。地名の方はとりあえず新漢字で金沢と表記するが、なぜ地名の金沢を採用したのであろうか。「検非違使に問はれたる傭の物語」で、「名は金澤の武弘、年は二十六歳でございました。いえ、優しい氣立でございますから、遺恨など受ける筈はございません。」「武弘は昨日娘と一しよに、若狭へ立つたのでございますが、こんな事になりますとは、何と云ふ因果でございませう。」と娘の母親が語っている。母の語りはすべて、芥川が原典に書き加えた要素である。京都から若狭（福

井）へ行くということは、金沢方面へ行くことであり、芥川は「金澤武弘が金沢へ行く」と書きたかったところを、あまりに露骨なので遠慮したのであろう。犀星の筆名の由来は有名だが、金沢の犀川の西に生まれ育つたことを犀星と言ひ換えた。金澤武弘という名前は、犀星の庭の竹から思いついた可能性があろう。犀星の隣に住む「ひろせたけし」という名には「たけ」と「ひろ」の音がある。「たけ」は竹に通じる。金沢にまつわる竹と「たけ」「ひろ」という音を組み合わせると、金沢たけひろという名はすぐに出来上がる。⁽¹⁵⁾

田端に関連して、竹のもつ詩的なイメージについても言及しておきたい。犀星の『抒情小曲集』（感情詩社、大正7・9）には「小曲」という詩があり、次のような竹が登場する。

眼つむりてすみやかに

君をねんじて十字をきれば

熱きもの

ひとすぢのけぶりとなりて

真青の竹をのほりゆく

ある意味でまっとうな竹のイメージであろう。アジアの植物にやや場違いなキリスト教の匂いもあるが、竹の竹らしさが描かれている。ちなみにこの詩のすぐ次に「月草」という詩がある。

秋はしづかに手をあげ

秋はしづかに歩みくる

かれんなる月草の藍をうち分け
つめたきものをふりそそぐ

われは青草に座りて

かなたに白き君を見る

月草とは露草のことであり、縹草のことであり、縹色は露草の花の色である。武弘は縹色の水干を着ていた。こうした植物のイメージの系譜が、作品「藪の中」には見られるのである。

この詩集に序文を書いた萩原朔太郎が田端に住むのは、大正十四年のことである。それ以前から、芥川は現代詩を非常によく読んでいた。¹⁶『月に吠える』は大正六年二月に刊行されている。出版に関してトラブルがあったが、朔太郎の親友でもあった犀星は『月に吠える』出版に尽力した。芥川にも詩集は届いているだろう。この詩集の「序」で、北原白秋はこう書いている。

びようびようと吠える、何かがびようびようと吠える。聴いてゐてさへも身の痺れるやうな寂しい遺瀨ない声、その声が今夜も向うの竹林を透してきこえる。降り注ぐものは新鮮な竹の葉に雪のごとく結晶し、君を思へば蒼白い月天がいつもその上にかかる。

大正六年一月十日の日付のある白秋の「序」には、「竹」という言葉が氾濫している。なぜなら『月に吠える』は、いわば「竹の詩集」であるからである。最初から竹の詩が続く。まず「地面の底の病気の顔」では次のように歌われる。

地面の底のくらやみに、
うらうら草の茎が萌えそめ、
鼠の巣が萌えそめ、

巢にこんがらかつてゐる、

かすしれぬ髪の毛がふるえ出し、

冬至のころの、

さびしい病気の地面から、

ほそい青竹の根が生えそめ、

生えそめ、

それがじつにあはれふかくみえ、

けぶれるごとくに視え、

じつに、じつに、あはれふかげに視え。

病的、神経的で、しかも生命力をもった竹の詩であるが、このあと「竹」という同じ題名の詩が二つ続くのは、やはり異常ともいえるであろう。

まずぐなるもの地面に生え、

するどき青きもの地面に生え、

凍れる冬をつらぬきて、

そのみどり葉光る朝の空路に、

なみだたれ、

なみだをたれ、

いまはや懺悔をはれる肩の上より、

けぶれる竹の根はひろがり、
するとき青きもの地面に生え。

以上が、最初の「竹」という詩である。この「懺悔」がキリスト教的懺悔であるとなると、ここにも竹とキリスト教の取り合わせが現れる。次に、二番目に収録された「竹」という詩を引用する。

光る地面に竹が生え、

青竹が生え、

地下には竹の根が生え、

根がしだいにほそらみ、

根の先より纖毛が生え、

かすかにけぶる纖毛が生え、

かすかにふるえ。

これが第一連で第二連は次のような形で続く。

かたき地面に竹が生え、

地上にするどく竹が生え、

まつしぐらに竹が生え、

凍れる節節りんりと、

青空のもとに竹が生え、

竹、竹、竹が生え。

こうした竹の詩的イメージが、芥川の内部に何らかの影響を与えていたと考えられる。鋭くまつしぐらな生命力、病的で気味の悪い明るさが竹にはある。神経的に病みながら生命力の横溢する感覚、

竹の持つ神秘的な動物的なエネルギー、そんな感覚を、芥川は竹に求めていたのかもしれない。⁽¹⁷⁾

裸根も春雨竹の青さかな

これは、「京都日記」(「大阪毎日新聞」大正7・7・22、29)中に芥川が記した句である。文章の方では「不思議に京都の竹は、少しも剛健な気がしない。如何にも町慣れた、やさしい竹だと云ふ気がする。根が吸ひ上げる水も白粉の匂ひがしてゐさうだと云ふ気がする」と書いており、白粉の比喩で竹に女性を感じている。⁽¹⁸⁾

ここで「藪の中」の犯罪現場の地名について、はっきりさせておこう。「山科の駅路からは、四五町程隔たつて居りませう」「あの男は馬に乗つた女と一しよに、関山の方へ歩いて参りました」という証言から、事件の現場は、山科の駅から逢坂関方面へ約五〇〇メートル歩いたあたりということになる(一町は約一一〇メートル)。

山科とは京都の東に位置する地域で、地名に山が付くが、北に大文字山(如意ヶ嶽)、西に東山、東に逢坂山が控えている。作品に登場する関山とは、この逢坂山である。滋賀県大津市の西部に位置する標高三二五メートルの山で、手向山とも呼ばれる。峠にある逢坂関は、山城国と近江国の国境であり、交通の要衝であった。百人一首の「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」(蟬丸)で知られる。有名な関所があるので、関山というのである。京から出て行く人も帰る人も、知り合いも他人も、誰もがここで分かれ、また出会う場所だという。能「蟬丸」では、皇女・逆髪

(シテ)が狂乱のあまり京を彷徨い出て逢坂へとやって来る。そこで逆髪は弟・蟬丸と再会する。しかし、定めによって、やがて別れゆく。このようなドラマに満ちた逢坂関までいかないうちに、「藪の中」の事件が起こっている。まだ京都を離れているわけではない。現代の呼び方でいうと、山科区の西隣に東山区があり、そこに清水寺がある。山科から京都方面に逃げた眞砂が清水寺に駆け込んだ点に、違和感はない。つまり「藪の中」の舞台の竹藪は、街中ではないとはいいながら、京都の竹である。そこに芥川はある種の女性性において感じていたのではないだろうか。舞台を大江山から京都山科に代えたのも、そのような理由からであろうか。⁽¹⁹⁾「藪の中」に頻出する「竹の落葉」には、あたかも女性のいる褥のようなやわらかい雰囲気がある。それはやはり女性性における表現なのではなかっただろうか。⁽²⁰⁾芥川の内部で、竹の生命力と女性的なイメージが結びあわされている。

竹のイメージは、女性の神秘的な力とも結びついている。それは『今昔物語集』に描かれる生々しさや生命力、野生の美しさとも結びついている。だが、ここで謡曲についても言及しておこう。「道成寺」「海人」をはじめとして、謡曲に女人が超自然的な力を見せる曲が多いことは言うまでもない。芥川はもちろんそのことも知っていた。たとえば「われわれの文字は『今昔物語』以来、超自然的存在に乏しい訳ではない。且また近世にも『雨月物語』等の佳作のあることは事実である。けれども謡曲の後シテ以外に誰がこの美し

い威厳を彼等の上に与へたであらうか?」(『鏡花全集に就いて』「東京日日新聞」大正14・5・5(6))と述べている。例えば謡曲「竹生島」は、光り輝く弁才天と龍神の舞が魅力のお能であるが、「竹に生まるゝ鶯乃。竹に生まるゝ鶯乃竹生島詣急がん」と始まり、「弁才天ハ女体にて。その神徳もあらたなる。天女と現じおはしませば。女人とて隔てなしたゞ知らぬ人の言葉なり」という地謡が名高い。

4

「藪の中」が『今昔物語集』に依拠する以上、『今昔物語集』中にある「竹」の記憶を考えなければならない。竹は、どのようなイメージで『今昔物語集』に登場しているのだろうか。

まず巻二十三第二十四話を考えてみたい。タイトルは「相撲人大井光遠妹強力語第廿四」である。途中まで引用する。テキストは芳賀矢一校訂『攷証今昔物語集』(富山房、大正10・4)を基本とし、読み仮名をカッコに入れるなど、少し改変している。

今昔、甲斐国に大井の光遠と云ふ左の相撲人有き。短太(ひきふと)にて、器量(いかめし)く、力強くて、微妙なりし相撲也。其れが妹に、年廿七八許にて、形ち有様美麗なる女有けり。其の妹、離れたる屋になむ住みける。

而る間、人に追はれて逃ける男の、刀を抜て、其の妹の居たる家に走り入にけり。其の妹を質に取て、刀を差宛て抱きて居

けり。家の人、此れを見て、驚き騒ぎ、光遠が居たる家に走り行きて、「姫君は質に取られ給にけり」と告げれば、光遠、騒がずして云く、「其の女房をば、昔の薩摩の氏長許こそは質に取らめ。」と云て居たりければ、告たる男、「怪し」と思て、走り返りて、不審（いぶかし）さに物の迫（はざま）より覗きければ、九月許の事なれば、女房は薄綿の衣一つ許を着、片手しては口覆をして、今片手しては男の刀を抜きて差宛し肱（かひな）を、和（やは）ら捕たる様にて居たり。男、大なる刀の恐し気なるを、逆手に取て、腹の方に差宛て、足を持て後よりあくまで抱て居たり。

此の姫君、右の手して、男の刀抜て差宛たる手を、和ら捕たる様にして、左の手にて顔を塞（ふたぎ）たるを、泣々く其の手を持て、前に箭篠の荒造たるが、二三十許打散されたるを、手まさぐりに節の程を指を持て板敷に押蹠（おしにじり）ければ、朽木などの和（やはらか）ならむを押碎む様に、碎々（みしみし）と成を、「奇異（あさまし）」と見る程に、此れを質に取たる男も目を付て見る。此の睨く男も此れを見て思はく、「兄の主、うべ騒ぎ給はずは理也けり。極からむ兄の主、鉄鎧を以て打碎かばこそ、此の丈は此くは成らめ。此の姫君は何許（いかばかり）なる力にて此くは御するにか有らむ。此の質に取たる男はひしがれなむ」と見る程に、此の質に取たる男も此れを見て、益無く思へて、「譬ひ刀を以て突とも、よも突かれじ。

肱取りひしがれぬべき女房の力にこそ有けれ。此許にてこそ、支体も碎かれぬべかめり。由無し。逃なむ」と思て、人目を量て棄て走り出て、飛ぶが如くに逃けるを、人、末に多く走合ひて、捕て打伏せて縛て、光遠が許に将行たれば、光遠、男に、「汝、何に思て質に取る許にては棄て逃つるぞ」と問ひければ、男の云く「為べき方の候はざりつれば、例の女の様に思て質に取奉て候つるに、大きな箭篠の節の許を、朽木などを碎く様に、手を以て押碎き給つるを見給へつれば、奇異くて、『此許の力にては、腕折り碎かれぬ』と思給へて、逃げ候つる也」と。話はまだ続くが、とりあえず、ここまでの主要部分の現代語訳を以下にあげておこう。

昔の話だが、甲斐の国に大井光遠という相撲取りがあった。背は低いが立派な体つきで、力が強いうえに足が早く、うまい相撲をとった。その妹に、年は二十七八ばかりで、姿の美しい女がいた。その妹は離れの屋敷に住んでいた。あるとき、人に追われて逃げていた男が、刀を抜いて妹の居る屋敷に走って入りこんだ。そしてその妹を人質に取り、刀を差し宛てて抱きついた。家人はこれを見て驚き騒ぎ、光遠の家に走って行き、「姫君が人質に取られた」と告げた。すると光遠は騒がず、「その女性を質にとることができるのは、昔の薩摩氏長ぐらいのものだ。」といった。告げに走った男が、変だと思いつつ、家に帰って様子をうかがうと、九月のことなので、姫は薄綿の衣一

つばかりを着た姿で、片手で口を覆い、もう片方の手で、男の刀を持つ腕の肘を、そっとつかんでいた。

男は、大きな刀を逆手に握って姫の腹に差し宛てて、後から脚を絡ませて姫に抱きついていった。すると姫君は、右の手で男の刀を持った手をそっとつかみ、左手で顔を塞いでいたが、その左手で、前のほうに転がっていた三三本ばかりの箭篠を次々と掴み、節を指で板敷にあてて、遊び始めた。箭篠はまるで柔らかい朽木のように碎けた。それを覗いていた使いの男は驚愕し、賊の男も目をむいて驚いた。

部分的であるが、ここまでが大体の現代語訳である。この賊は驚いて逃げ出したのだが、捕らえられてから、逃げた理由をこう語る。「普通の女と思って人質に取ったが、大きな篠竹の節を手でやすやすとつぶすところを見て、肝をつぶした。このままでは自分の腕も折られてしまうと思って、逃げ出した。」固い竹を片手でつぶしてしまう力持ちでは、腕も折られてしまうというのは、至極もつともな話である。

箭篠（やじの）とは、ヤダケ（矢竹）ともシノダケ（篠竹）ともいわれる竹である。まっすぐで、昔から弓の矢に用いられる。「鉄鎚を使わなければ碎けまい」というシノダケの堅い節を指で碎いてしまうほどの、恐ろしい怪力が女性に備わっている。面白いのは、その女性が至極か弱い女らしくふるまい、顔を手で覆ったりしている点である。そのうえで、さりげなく怪力を示す。力を誇示してい

ない。しかし男は驚いて震え上がるのである。ここでは竹が、たおやかでありながら女がもつ底知れない力、恐ろしさを表す道具として使われている。芥川のうちには、このような思いがけない女の底力を示す竹のイメージが存在していたと考えられるのである。

また、『今昔物語集』の竹の物語といえ、これだと誰もが考える有名な話がある。卷三十一の第三十三話である。タイトルは「竹取翁見付女兒養語第卅三」である。やはり途中まで、引用しておく。

今昔、□□天皇の御代に、一人の翁有けり。竹を取て籠（こ）を造て、要する人に与へて、其の功を取て、世を渡けるに、翁、籠を造らむが為に、篁に行き竹を切けるに、篁の中に一の光り有り。其の竹の節の中に、三寸許なる人有り。

翁、此れを見て思はく、我れ年来竹取つるに、今此る物を見付たる事を喜て、片手には其の小き人を取り、今片手に竹を荷て、家に返て、妻の姫に、「篁の中に此る女兒をこそ見付たれ」と云ければ、姫も喜て、初は籠に入れて養けるに、三月許養けるに、例の人に成ぬ。

其の児、長大するまに、世に並び無く端正にして、此の世の人とも思へざりければ、翁・姫、弥よ此れを悲び愛して傳ける間に、此の事、世に聞え高く成てけり。

而る間、翁、亦竹を取らむが為に篁に行ぬ。竹を取るに、其の度は竹の中に金を見付たり。翁、此れを取て家に返ぬ。然れ

ば、翁、忽に豊に成ぬ。居所に宮殿・樓閣を造て、其れに住み、種々の財庫倉に充ち満てり。眷属、衆多（あまた）に成ぬ。亦、此の児を儲てより後は、事に触れて思ふ様也。然れば、弥よ愛し傳く事限無し。

而る間、其の時の諸の上達部・殿上人、消息を遣て仮借（けさう）しけるに、女、更に聞かざりければ、皆心を尽して云せけるに、女、初には、「空に鳴る雷を捕へて将来れ。其の時には会はむ」と云けり。次には、「優曇華と云ふ花有けり。其れを取て持来れ。然らむ時に会はむ」と云けり。後には、「打たぬに鳴る鼓と云ふ物有り。其れを取て得させたらむ折に、自ら聞えむ」など云て会はざりければ、仮借する人々、女の形の世に似ず微妙かりけるに耽て、只此く云ふに随て、堪難き事なれども、旧く物知たる人に此等を求むべき事を問ひ聞て、或は家を出て海辺に行き、或は世を棄て山の中に入り、此様にして求める程に、或は命を亡し、或は返来ぬ輩も有けり。

現代語訳は割愛する。いわゆる「竹取物語」の話である。この世では誰ひとり太刀打ちできない、神秘的な力と美しさを秘めた女性が、「竹」のイメージと強く結ばれている。竹と金（きん）の結びつきも明らかである。女性には、取り付く島がないほどの冷たさ、残酷さも感じられる。こうして竹には、超自然的な力を持つ女性というイメージが付与されるのである。『今昔物語集』における女性と竹との関係に、このような記憶が抜きがたく存在する。

「藪の中」で、眞砂は月毛の馬に乗っている。クリーム色の月のような色をした馬のことだが、つまり月の乗り物に乗っている女ということになる。それはかくや姫であろう。法師髪は鬘が切りそろえられていることであるが、馬が法師であるというイメージは、やはり不思議な感覚を呼び起こすであろう。眞砂という何を考えているのかわからないが、残酷でかつ魅力的な女性を描くときに、月と竹が登場することは、ある意味で自然の流れではなかっただろうか。

芥川晩年の「歯車」の中に、こういう記述がある。「するとロツビーへ出る隅に緑いろの笠をかけた、背の高いスタンドの電燈が一つ硝子戸に鮮かに映つてゐた。それは何か僕の心に平和な感じを与えるものだつた。」「そのうちに僕は縁起の好い緑いろの車を見つけ、兎に角青山の墓地に近い精神病院へ出かけることにした。」「彼女の着てゐるのは遠目に見ても緑いろのドレッセスに違ひなかつた。僕は何か救はれたのを感じ、ちつと夜のあけるのを待つことにした。」「不吉なもの、死の予感も混じっているが、芥川は緑に対してある種の救いを感じている。青山墓地近くの精神病院が出てくるが、芥川は実際に斎藤茂吉の診察を受けていた。緑のスタンド、緑の車、緑の女。こうした緑色への神経で感じるような関心は、芥川の竹に関する神秘的な思いにも通じているのではあるまいか。

青山という地名がある。青葉というときと同じで、青は緑のことである。現在も、青山学院のスクールカラーは緑である。青山の茂吉の病院は青山学院から徒歩十分というところだが、通院するとき、

芥川は彌生のことを思い出さないでいられたであろうか。青山女学院に通っていた吉田彌生には、緑の匂いがある。もちろん弥生月の生まれ（明治25年3月14日生まれ、龍之介は同年3月1日生まれ）であるが、その月名は、春に草木が生い茂ることを弥生（いやおい）というようになり、それが「やよい」になったといわれる。そして青山女学院はキリスト教の色彩の濃い場所である。芥川にはキリスト教と女性を結び付けた作品が多い。

5

ここで「竹」をしばらく離れて、芥川における「女の力」のテーマを持つ作品をいくつか分析しておこう。

「龍」〔中央公論〕大正8・5）には典拠があり、『宇治拾遺物語』「序」および卷十一の六「藏人得業猿沢池の龍の事」によって書かれている。ここで作品のあらすじを確認しておこう。昔、奈良に鼻の大きい恵印という法師がいた。猿沢の池に行き「三月三日この池より龍昇らんずるなり」という嘘の建礼を立てた。すると実際にその日、雷が鳴り稲妻が光り、水煙と雲の間に十丈あまりの黒龍が昇天する姿が見られた。恵印は悪戯が凶星だったのか的外れだったのか、わからないままである⁽²⁾。

このような物語であるが、原典では龍はどんな形にしても現れない。したがって、次のような描写はすべて芥川の手になるものであ

る。

するとここにまた思ひもよらない不思議が起つたと申しますのは、春日の御社に仕えて居りますある欄宜の一人娘で、とつて九つになりますのが、その後十日と経たない中に、ある夜母の膝を枕にしようとうと致して居りますと、天から一匹の黒龍が雲のやうに降つて来て、『わしはいよいよ三月三日に天上する事になつたが、決してお前たち町のものに迷惑はかけない心算だから、どうか安心してゐてくれい。』と人語を放つて申しました。そこで娘は目がさめるとすぐにこれこれからかうと母親に話したので、さては猿沢の池の龍が夢枕に立つたのだと、たちまちまたそれが町中の大評判になつたではございませんか。

（中略）すると叔母は大意をついて、しばらくは口もきけないのか、ただ何度となく恐ろしさうに頷くばかりでございましたが、やがてまた震へ声で、『見たともの、見たともの、金色の爪ばかり閃かいた、一面にまつ黒な龍神ぢやろが。』と答へるのでございます。

龍の昇天に関して、恵印は唯うろたえるばかりである。しかしそれに比して、幼女も老女も、いわば女の底知れない力がそこに展開していく。それは女たちの疑うことを知らず、一心に信じる力であり、行動する力である。世界を作っていくのはこうした女たちであり、男などは、何とか契機を作りえたとしてもその意味を理解せず、

とにかく恐れとまどうばかりであるという感覚が描かれている。作品の主題はそこにある。⁽²²⁾

これは実は芥川のほかの作品にも多く通底しているテーマではないだろうか。いくらでも例が挙げられるが、例えば切支丹物の「おぎん」(『中央公論』大正11・9)、「おしの」(『中央公論』大正12・4)などにおいても、こうした女の底知れない力の前に、男がいかに無様で軽薄で無力であるかが繰り返し描かれている。⁽²³⁾

もう一つ、古典に典拠のある作品として「仙人」の例を出してみよう。芥川には「仙人」という作品が二作あるが、ここで問題にするのは大正五年の作ではなく、「サンデー毎日」(大正11・4・2)に掲載された作品である。これは大正五年の「仙人」と同様に、『聊斎志異』の「勞山道士」から素材を得ている。そこで芥川は、医者とその妻という存在を創作した。特に医者の方は影が薄く、その女房が大きな役を演じている。あらずじを以下に確認しておく。

昔、大阪の街に奉公に來た權助という男がいた。彼は「不老不死の仙人になりたい」と考えた。近所の医者の方が「うちで働けば二、三年中に仙人にする」と言った。翌日やってきた權助に対し、女房は「二十年間奉公すれば仙人になる術を教えてやる」と話を変える。權助は二十年間無給で奉公した。彼が術を教えてくれと言うと、女房は「あの庭の松の木へ登って両手を放せ」と命じた。彼は木の上で両手を放しても落ちず、仙人になれたことへの謝意を告げると、空高く昇った。

これも「龍」と同じで、誰かが時節を区切って指示した後、約束通り何か(誰か)が空に登る超自然的な物語である。嘘から出たまことという趣を持っている。しかし、いずれにせよ、權助を仙人へと導いたのは、医者の方であることは明らかである。⁽²⁴⁾

大方の論は、この妻を悪人で俗物で嘘つきだと規定している。しかし、もし、この妻が本当に仙人になる秘法を知っていて、最初から權助の素質を見抜いたうえで適切な指導をしていたとすればどうなるであろうか。作品には、極悪非道の妻などという言葉は一切描かれていない。男には予想もつかない、女の底知れない力、男には到底計り知れない力を、この医者の方に見ておくこともできるのである。或いは、その力の存在すら認識できないのが男ということになるのである。

「仙人」は「女仙」(『譚海』昭和2・6)と合わせて読まれるべきであろう。「女仙」は、若い美しい隣家の女が、三千六百歳の女仙人であることがわかる話である。女は七十歳ほどに見える息子を打擲する。男性を凌駕する力を持った、したたかで神秘的な女性の姿が印象的に描かれている。また切支丹物には、純粹にキリスト教を信じて結果的にしたたかに生きのびる少女たちが描かれるが、中国を舞台にした「南京の基督」(『中央公論』大正9・7)も同じ構造を持っている。実際に奇跡のような現象が起きており、それがキリスト教信仰による恩寵ではないとは誰も言えない。そして、その背後に破滅していく男の姿が描かれる。

医師の妻といえ、例えば芥川は「大正十二年九月一日の大震に際して」（『大震日録』の章）の中で、関東大震災当日の様子を記録している。その中で、近所の下島医師の夫人のことを称賛している。そしてその胆勇にはかなわないといっている。

この日、下島先生の夫人、単身大震中の薬局に入り、薬剤の棚の倒れんとするを支ふ。為めに出火の患なきを得たり。胆勇、僕などの及ぶところにあらず。夫人は澀江抽斎の夫人いほ女の生れ変りか何かなるべし。

もともと芥川の内部には、こうした「女の力」に関する興味と驚きが存在していたのである。そしてその驚きの根底には、短篇「羅生門」のモチーフとなった、彌生という若い女性の不可思議な存在と、伯母フキのエゴイズムの強さに対する、悲鳴にも近い驚愕の念があったのである。⁽²⁵⁾

6

「今昔物語鑑賞」（『日本文学講座』第六卷、新潮社、昭和2・4所収）で、芥川は『今昔物語集』が「野生の美しさに充ち満ちている」と述べている。『今昔物語集』には不思議な出来事や超人的な力、生々しい欲望などが描かれている。このような恐怖と尊敬とを同時に感じさせる力を持った超自然的存在に通じる扉として、物語にしばしば登場する強い女性、神秘的な女性を芥川は意識していたと思われる。「たとへば金剛峯寺の不動明王はどこか精神病者の夢に似た、

気味の悪い莊嚴をそなえている。あの気味の悪い莊嚴は果たして想像だけから生まれるであろうか？」と芥川は述べているが、彼は幼時から竹藪に対して超自然的な気味の悪さを感じていた。そして、同時に、彼は生涯、女性に対しても、やはり気味の悪い莊嚴さのようなものを感じていたのだと思われる。もちろんそれは莊嚴さというだけではなくて、芥川を蠱惑する女性という存在の矛盾に満ちた魅力の源泉にもなっており、人間臭さというものを彼に教えたものであろう。彼は女性のエゴや欲深さにも理解を示していたし、またそれは同時にあわれという感情を呼び起こすものでもあった。この「今昔物語鑑賞」の中には、こういう一節がある。

「今は昔、年若くして形美麗なる男有けり。……其の男何れの所より来けるにか有りけむ、二條朱雀を行くに、朱雀門の前を渡る間、年十七八歳許なる女の形端正にして姿美麗なる、微妙の衣を重ね着たる大路に立てり。……門の内に人離れたる所に女を呼び寄せて、……男女に云く、「……君我が云はむ事に随へ。此れ懇に思ふ事也」と。女の云く、「此れ可辞事に非ず。云はむ事に可随しと云へども、我若し君の云はむ事に随ひては、命を失はむ事疑ひ無き也」と。男何事を云ふとも不心得ずして、只辞ふる言也と思ひて、強（あながち）に此の女を懷抱せむとす。女泣々云く、「君は世の中に有て家に妻子を具せるらむに、只行ずりの事にこそ有れ。我は君に代て、戯れに命失はむ事の悲き也。」如此く諍ふと云へども、女遂に男の云ふに随ひぬ。

……」(本朝の部卷四。為救野干死写法花人語第五)

この話の中の女は実は狐の化けてゐたのである。が、彼等の問答は長椅子の上にも行はれるであらう。狐は一夜を明かした後、扇に顔を隠したま、武徳殿の中に倒れてゐた。しかもその扇は形見の為に男の贈つた扇だつた。僕はこの話を『今昔物語』の中でも最も抒情詩的な話の一つに数へてゐる。秋の日のさしこんだ武徳殿の外には、或は野菊の花なども咲いてゐたであらう。

芥川があげた物語に登場するこの狐は、女性の比喩であると考えてよいだろう。これは「藪の中」の構図に似てゐるのではないか。女が男に無理やり言い寄られるが、死を賭して女は身を任す。ここに「女の力」といってよいもの、その強さとあわれという情調とが見えるのである。もちろん眞砂は美しいだけではなく、欲望としたかさを備えた女性である。若いころから芥川は、初恋の相手吉田彌生が嫁いでいき、人妻となった姿を様々に想像してゐたであらう。実はこの狐の姿に彌生を重ねながら、彌生について幾たびもその心を疑い、また信じ、そして考え続けてゐたのではあるまいか。芥川にとって「羅生門」という作品のテーマも、実はこうした深いところにある「女の力」を描くことにはあつたのではないか。

女の奥深さ、強さ、したたかさを、また一抹のあわれという感情を誘う抒情的な一面を、芥川は彌生との失恋事件を通して学んだ。羅生門にのぼった下人は、とにかく生き延びようとする老婆に出会

い、また死体になった若い女(生前、男たちを騙してゐた)などの姿を目の当たりにする。下人は理屈でその女たちを理解しようとする。そして理解できたような氣になっている。しかしその程度の理解などは、結局は浅薄極まるものであり、下人などは到底これら女たちにはかなわないのである。死骸の若い女は、蛇を四寸ばかりずつに切つて干したのを、「干魚だ」といって太刀帯の陣へ売り、男たちは「この女の売る干魚は味がよい」といって買つてゐたという。男などは女の底力にみな振り回される存在である。

「羅生門」には、吉田彌生との失恋事件が大きな影を落としてゐる。老婆はフキ、死体の若い女性は彌生であらう。彌生の本心をめぐる懊悩や、伯母フキとの対立など、失恋事件を通して芥川が得たものの中に、女に対するある種の敗北感があつたのではあるまいか。先にも引いたとおり、多襄丸は、「その時風の吹いた拍子に、牟子の垂絹が上つたものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思ふ瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはその為もあつたのでせう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩のやうに見えたのです。」と語つてゐる。²⁸多襄丸でもこの女の本性を見抜けなかつた。女はとても仏とは思えない強さと意地の悪さと残酷さを発揮する。しかしそれがまた、多襄丸を惹きつける。

読者が「源氏物語」を想起するかどうかは別として、牟子の垂絹が上つて垣間見えた女性の顔は白いと考えるのではないだろうか。映画「羅生門」でも、眞砂の顔は白く女性らしい。ところが、芥川

はその運命的な顔を「顔は色の浅黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜実顔でございます」と描いている。

ここで顔の浅黒い女菩薩像というのは、意外の感を受ける。この意外さの理由は、この顔が吉田彌生をモデルにしているからなのではあるまいか。

吉田彌生の夫金田一光男は、彌生の父である吉田長吉郎と同郷であり、岩手県盛岡の出身であった。結婚後、彌生夫婦は夫の任地である大阪に移った。若狭の国の国府の侍で、若妻を連れて若狭へ旅立つ金澤武弘には、陸軍中尉金田一光男の影が見える。

金沢の匂いの色濃い東大キャンパスから見ると、弥生町と真砂町は反対の位置にある。「藪の中」を書く芥川にはおそらく、彌生の内実がつかみきれなかったという悔いがまだ尾をひいていたと考えられる。彌生も、顔は浅黒く、うりざね顔でほくろがあったのかもしれない。芥川が、「羅生門」のように『今昔物語集』から材を借りて強盗の物語である「藪の中」を書くとき、動物的エネルギーに満ちた若い男が、真面目そうな金澤武弘の若妻を奪うという設定に、彌生に対する秘めた思いを込めたのではないだろうか。そこには芥川が、人妻となった彌生を奪い返すという夢想も紛れ込んでいたのではあるまいか。彌生を自分のものとし、陸軍中尉金田一光男に一太刀浴びせるような欲求も、芥川にはあったのではないだろうか。しかしそうした欲求を、曖昧なまま脳裏にしまい込み、藪の中へ葬ろうとしたのがこの作品であつたのではないだろうか。

仲を引き裂かれてしまったが、吉田彌生の真意を芥川はまだ理解していない。納得をしていない。言ってみれば、彌生の行方は誰も知らないのである。芥川は未練の心を断ち切ることができない。しかし、少なくとも、そのなかば病的で神経的で、またなかばまっすぐな思いの行方が、うやむやのまま終わるだろうという見通しが、芥川の視野には入っていたのである。その設定の痕跡が、竹なのであり、竹の闇なのであり、竹の落ち葉なのでなかっただろうか。⁽²⁸⁾芥川が「藪の中」と書いた時の「藪」とは、そのような複雑なニュアンスを含んだ言葉だったのではないだろうか。そしてこの「藪の中」というタイトルは、「下人の行方は、誰も知らない」という「羅生門」を改稿した時の末尾と、深く響きあっていたのではあるまいか。

小学生のころ、龍之介は「どこの長唄の女師匠は亭主の怨霊にとりつかれてゐるとか、ここの仕事師のお婆さんは嫁の幽霊に責められてゐるとか、いろいろの怪談を聞かせられた。それをまた僕に聞かせたのは僕の祖父の代に女中をしてゐた「おてつさん」といふ婆さんである」という（『追憶』『文藝春秋』大正15・4・16・2）。「或日の午後、「てつ」は長火鉢に頬杖をつき、半睡半醒の境にさまよつてゐた。すると小さい火の玉が一つ、「てつ」の顔のまはりを飛びめぐり始めた。「てつ」ははつとして目を醒ました。火の玉は勿論その時にはもうどこかへ消え失せてゐた。しかし「てつ」の信ずる所によればそれは四五日前に死んだ「てつ」の飼ひ猫の魂がじゃ

れに來たに違ひないと云ふのだつた」というエピソードもある。繊細で神経質な芥川少年の心身に深くまわりつくように、不思議な「女の力」が物語として存在していた。そうした土壌から「羅生門」が生まれ、「藪の中」が生まれたのである。若き日には剛直で崩れかけた羅生門に譬えられていた「女の力」は、芥川の結婚後、次第にしりながら繁茂する竹へと象徴性を変容させていった。竹の変幻性と女性の変幻性が重なりとすれば、藪の中とは、女性の解けない矛盾のさなかにいるという意味になるだろう。そこには愛欲や憐憫や嫌悪の情を越えた、自分の手に負えぬものへの、尊敬と仰望の念も生じていたのではあるまいか。²⁰⁾

(注)

(1) 篠崎美生子の「藪の中」の解説(関口安義・庄司達也編『芥川龍之介全作品事典』勉誠出版、平成12・6)は、次のように述べている。

おぞましいと言えば、「藪の中」のプレテクストの一つ『今昔物語集』巻第29「具妻行丹波国男於大江山被縛語第二十二」で手込めにあった妻が夫の不注意を咎めつつも平然と旅を続ける姿に、おぞましくもたのしい近代批判の声を聞くことができる。そもそも「藪の中」には、比較文学の見地から16もの西欧文学のプレテクストが認められており(渡辺正彦「『藪の中』における〈現実の分身化〉」『国

文学』1996・4)、かように大量のプレテクストを呼び込むところにも、「藪の中」の複雑さを見てよいかもしれない。

「藪の中」が、多くの先行文学作品を呼び込むという指摘は理解できる。ただし古典の原典における妻の描写に近代批判を見るという点が、ややわかりにくい。ちなみに「具妻行」の話は「第二十二」ではなく「第二十三」である。また澤西祐典は「藪の中」の解説(庄司達也編『芥川龍之介ハンドブック』鼎書房、平成27・4)で、ブラウニング「指輪と本」、ピアス「月明りの道」、作者不詳「ボンチュー伯の娘」、O・ヘンリー「運命の道」などの影響を指摘する論文を列挙しつつ、「客観的な真実を伝えず、読み手の読書行為にまで肉薄してくるテーマは「藪の中」独自のものだと言える」と断じている。先行する文学作品に依拠しない、「藪の中」における独自のテーマや感覚について、もっといいねいに考えなければならぬであろう。その中に「竹」のテーマがある。少なくとも、「竹」は西洋文学の影響で現れた小道具ではない。

(2) 『新潮日本古典集成 今昔物語集 本朝世俗部 四』(新潮社、平成27・1)を始めとする諸本や、高木健による現代語訳(インターネットサイト九島伸一「情報、知識、義政」に掲載)等を参照して、現代語訳文のある一例を作成した。

(3) 例えば「舌切りすずめ」の雀は竹藪に住んでいる。楠山正雄

「舌切りすずめ」(『日本の神話と十大昔話』講談社、昭和58・5)によると、「野を越え、山を越えて、また野を越えて、山を越えて、大きな竹やぶのある所へ来ますと、やぶの中から、「舌切りすずめ、お宿はここよ。チュウ、チュウ、チュウ。」という声がしました。」(改行省略)と描かれている。「あんまり欲ばったりするものではない。」という教訓が「藪の中」の金澤武弘の例と重なってしまうので、このおとぎ話の竹藪のイメージは「藪の中」にとってプラスにはなるまい。この場合は、「竹」だといわない方がよいだろう。なお盗賊仲間として太刀を持つ「多襄丸」が登場する「偷盗」(『中央公論』大正6・4・7)では、「死骸は、あの藪中へ埋めずばなるまい。」「猪熊の爺の死骸は、斑々たる血痕に染まりながら、かういふことばのうちに、竹と凌霄花との茂みを、次第に奥深く昇かれて行つた。」このように描かれていて、猪熊の爺の死体を竹藪へ埋めたようである。しかし作品に竹藪という言葉は一度も登場せず、藪という言葉の曖昧さが保たれている。

(4) 「藪医者」という言葉がある。国語辞典編集者の神永暁は、「ヤブ医者」の「ヤブ」って何? (サイト「ジャパンナレッジ」中の「日本語、どうでしょう」第381回、平成30・5・28更新)の記事の中で、「昔は「野巫(やぶ)」と呼ばれる呪術医も多く、それらは病気を治すことのできない者がほとんどだったのではないか。それ故に、そのような者たちをおとしめて「野

巫」を「藪」「野夫」と表記して、診断治療の下手な医者や「やぶ薬師」「やぶ医師」「やぶ医者」と呼ぶようになったのではないだろうか」と述べている。岩淵悦太郎『語源散策』(毎日新聞社、昭和49・10、一七〇〜一七二頁)はすでにこの問題に触れており、呪術説では「藪連歌」という表現を説明できないが、「藪」が草深い田舎を意味しているとすれば、説明できるとしている。

(5) 「八幡(やわた)の藪知らず」ということわざがある。これは、古来、千葉県市川市八幡の竹藪が、一度入ると出口がわからなくなることから、迷って出られなくなることの例えとなっている。この藪は現存しており、土地の人々は深く畏敬の念を抱いていて、現在も立ち入りはタブーとなっている。明治四十三年十一月、十八歳の芥川龍之介は、東京府立第三中学校「学友会雑誌」に「水の三日」を掲載している。この中に次のような文章がある。「何度聞き直しても、八幡の藪でも歩いてゐるやうに、さつぱり要領が得られないので弱つちまつた。」つまり「八幡の藪知らず」は、芥川の日常の語彙の中にはつきり刻まれた言葉である。なお、三中時代の恩師広瀬雄によれば、「丁度私が園芸に携わっていましたが芥川にもそれを勧めたのですが、園芸はあまり好まなかったようでした。土に親しむというより本に親しむといった男でした。」(『三高文藝』昭和25・5)という(引用は石割透編『芥川追想』岩波文庫、平成29・7、

三三五頁より)。園芸の趣味という点では、芥川より室生犀星と広瀬の方が話が弾んだはずである。

(6) 竹林救援協会の亜岐健司によるブログ「たけタケ竹バンブー」の記事「竹林と竹藪は違います。」(平成19・6・12、1時21分更新)によると、「人によって手入れされ、管理されているのが竹林です。タケノコの栽培竹林、販売用の竹を生産する管理竹林、美観の為に手入れされている環境美観竹林などです。人の都合で手入れされなくなり、10年以上放置され、枯れ竹、倒竹が多く人が入れにくい竹が密集繁殖している場所は、放置竹林、通称、竹藪です。」とある。ほかの多くの竹の専門家のブログにもほぼ同様のことが書かれている。

(7) 「死骸のまはりの竹の落葉は、蘇芳に滲みたやうでございませ」と木樵りは語っているが、蘇芳色は、もともと紫に次ぐ高貴な色とされ、着物の襲(かさね)の色目の呼び名でもある。真砂の衣の色である萩重ねは秋であるが、蘇芳も萩縦青、竜胆、落栗色、蘇芳菊などに用いられることが多く、基本的に秋の色目である。ただし、花蘇芳は春の季語で、他の季節の重ねにも蘇芳色は用いられる。また竹落葉は若竹の伸びるころに大量の落ち葉を降らせることから、俳句では夏の季語となるが、すぐに落ち葉が消えるわけではないので、秋の景であつてもおかしくない。芥川は盛夏である七月二十四日に自殺した。室生犀星は、「新竹のそよぎも聴きてねむりしか」と追悼の句を詠んで

いる。「新竹」は「若竹」と同じで夏の季語である。芥川家の庭には竹があつた。

(8) この夫は妻の前で情けない状況に置かれる。この点について、TREERATSAKULCHAI Siriporn 「藪の中」試論——真砂と武弘の服装を巡って」(『九大日文』平成21・3)は、「刀を失い「一本の杉の根がたへ、括りつけ」られた武弘は、権力・権威を喪失した存在として読み取れる。同時に、刀は「忠義と名誉の象徴」であるとともに、性的なニュアンスも持つ。細くて長いつるぎのイメージは、フロイト心理学では男性性器の象徴として捉えられている。刀の喪失は男性としての性的能力の喪失を意味している」と述べている。こうした太刀のイメージについては、日置俊次「芥川龍之介「羅生門」論——下人の太刀について」(『青山語文』平成30・3)を参照。

(9) 三好行雄『芥川龍之介論』筑摩書房、昭和51・9、二四二頁)は、「少年」(『中央公論』大正13・4・5)について次のように述べている。

しかし、「少年」は、芥川龍之介が生いたちを描いた最初の作品である。現存の地獄に降りたつことに代えて、かれは現存をして現存たらしめたもの、いわば存在の原点に遡源する試みにおおずと手をのばしはじめた。どれほど不徹底な形だったにしても、作者の回想が、個性形成の以前にまでさかのぼったという事実は、おのずと

作品の質と方法を動かさざるをえない。

三好行雄はこう述べており、的確で重要な指摘であるが、それ以前の王朝物の中に、すでに「少年」などに描かれた原点的な風景や回想、記憶が侵食している、あるいは素材として利用されていると考えておくべきであろう。

(10) 室生犀星の追悼句「新竹のそよぎも聴きてねむりしか」の竹は、この庭の竹を指している。

(11) 田端文士村記念館の「芥川龍之介 田端の家復元模型」を参照しても、竹の位置などは定かではないが、とにかく庭に木が多い。

(12) 「二 室生犀星」「野人生計の事」、「サンデー毎日」大正13・1・6

(13) 例えば随筆集『庭を造る人』（改造社、昭和2・6）の最初に収められている「庭をつくる人」では、竹の重要性が指摘され、「面倒なのは竹は二ヶ月に一度ずつ枯葉や蟻、毛虫のつかぬ様の手入れ、及び刈込、筍仕立、（それは毎年古竹を伐り新竹を立たすこと。）皮剥ぎの手入れが肝要である」と書かれている。

(14) 田端には金沢関係者が多い。金沢近郊には竹林が多く、竹工芸品が有名である。「加賀藩御細工所」にも竹工が従事していた。室生犀星が田端に居を定めたのは、小学校からの幼馴染である彫刻家、吉田三郎に誘われたからである。吉田は、金沢の石川

県工業学校彫刻科に進学した。主任教諭が板谷波山であった。

その後、吉田は東京美術学校（現東京芸術大学）に進学する。板谷波山は教職を辞して上京し、田端に暮らす。そこで教え子の吉田も田端で暮らしはじめる。吉田と犀星は同時期に結婚するが、二人の妻はともに、金沢の同じ小学校を出ている。芥川は府立三中（現両国高校）で、金沢出身の広瀬雄に五年間英語を習う。芥川の斡旋で広瀬雄も田端に引越す。金沢出身の泉鏡花との交際も深まり、芥川は金沢関係者に取り巻かれている。なお金沢の四高出身である中野重治や窪川鶴次郎が、犀星を慕って田端にやってくるのは関東大震災以後のことで、「藪の中」との関連はないが、とにかく金沢関係者が田端に集まる傾向があったという。

(15) 大正九年三月に長男芥川比呂志、大正十一年十一月に次男芥川多加志が誕生している。子供の名前については、菊池寛と小穴隆一の名から一字とり、その音を使ったともいわれる。タカシとヒロシという音から見て、芥川はタカやヒロといった感じの響きが好きであったらしい。金澤タケヒロの名がその響きである。タケヒロは「優しい気立」だとわざわざ描かれているが、そこには犀星の影も指摘できる。犀星の妻とみ子も金沢に生まれ育った。犀星に深く愛された。四十三歳で脳溢血に倒れて半身不随となったあとも、娘に「お母様ほど幸せな女はいません。お父様がとても優しい人だから」と語ったという。室生犀星記

念館に関する新聞記事「室生犀星の最愛の妻「とみ子」の一生から見る家族愛と文学——金沢で企画展」(「金沢経済新聞」平成21・4・23、公式サイト)等を参照した。なおこれまで金沢を強調してきたが、若狭の国である福井県越前市公式サイトの記事「福井藩本多家江戸屋敷の知行地・越前府中(芥川龍之介も2ヶ月・武生の大井家で逗留)」によると、芥川が無名の未だ若き頃に「武生(現 越前市)の大井家に客人として数カ月滞在」したという。「たけふ」は、金澤武弘の名の音に近い。金澤武弘の姓名には金澤と若狭が組み合わさっていたとも考えられる。また、福井県は良質な竹がとれることで有名である。

(16) 萩原朔太郎は「芥川龍之介の死」(「改造」昭和2・9)で次のように述べている。

芥川君は、詩に対しても聡明な理解をもつてゐた。彼は佐藤春夫、室生犀星、北原白秋、千家元麿、高村光太郎、日夏耿之介、佐藤惣之助等の詩を、たいてい忠実に読破してゐた。のみならず、堀辰雄、中野重治、萩原恭次郎等、所謂新進詩人の作物にも、一通り広く目を通してゐた。彼はよく詩壇を論じ、詩について批評した。そして彼の見識は、殆んど大抵の場合に正鵠だった。この公平な理解と見識では、詩壇の最も高い純粹鑑賞に劣らなかつた。しばしば芥川君は、私の古い詩について意見を述べ、表現技巧の欠点を指摘された。彼はいつも大膽に私に言った。「君

の詩は未完成の芸術だ」と。そして自分は之を承認した。なぜならば私の詩は、彼の指摘によつて実際欠点だらけの物に見えたから。

(17) 芥川には「冬の日や障子をかする竹の影」「竹藪の中見透かすや今朝の雪」といった句がある。少なくとも初めの句は自宅の庭にある竹であろう。藪野直史の優れた研究サイトにある「やぶちゃん版芥川龍之介句集」の「餓鬼句集澄江堂句抄」を参照した。

(18) 「京都日記」(「大阪毎日新聞」大正7・7・22、29)

(19) 海老井英次「藪の中」——〈中有〉の世界と自己劇化」(「芥川龍之介論攷——自己覚醒から解体へ」桜楓社、昭和63・2)に詳しい研究史のまとめがある。地名の改変に関しては「事件の現場が大江山から関山へ移されたについても」袴垂松関山虐死殺人語第十九」あたりの影響がみられる」と指摘されている。確かに『今昔物語集』の中では、関山という言葉が使われている。

(20) 芥川が俳句に凝っていたことは周知のとおりである。春の季語に「竹の秋」、夏は「竹の子」「竹移す」「若竹」「新竹」、秋は「竹伐る」「竹の春」、冬は「竹馬」などがある。先にも触れた通り「竹落葉」は夏の季語である。「藪の中」はそれほど季節のはっきりしない物語であるが、馬が「青芒」を食べている。「青芒」とはまだ穂の出ない葉と茎の青々した芒のことで、夏

の季語である。芥川は俳句の季語で、季節感を表していた。十五夜の月見に萩と芒を飾る習慣があるが、眞砂の衣が萩重ねの色あい（萩の花の重なりを模した紫系統の重ね）であったことを考えると、まだ少し秋には早く、時節ではない青い印象、未成熟な印象が生まれる。それは眞砂の若さを表しているとも考えられる。

(21) ただし、「龍」には宇治の大納言隆国が面白い話を収集しており、陶器造の翁が話をするという枠組みがある。その次は行脚の法師が、池の尾の禅智内供の話をするという予告で小説は終わる。芥川の「鼻」と接続するようにできている。なお、龍や蛇（古来、龍と蛇は区別がつけられていない）が女人の神秘的な力を象徴する例は、先ほど挙げた謡曲「道成寺」「海人」「竹生島」などに明らかである。龍之介がその生まれ日の縁や名によって、龍を意識していたことは疑いがない。

(22) 例えば五島慶一「龍が昇るはなし」——芥川龍之介「龍」の典拠と〈物語〉構造」（『日本文学』平成25・6）は「自らがある意図のもとに発信した情報・〈物語〉はどこにどのようなのか、その過程では一体何が起きているのか。そもそもある出来事を語るとは、またそれを記録するとはいかなることなのか、逆から言えば、語られた物語・記録されたものとは何なのか。芥川文学の根柢を常に流れているこうした主題の、その本流に位置づけられるのがこの「龍」である」とまとめている。

る。女の力という視点を中心にしてこの作品を読む論は見当たらない。

(23) 例えば武田秀美「『おぎん』の二つのテーマについて——「隣人愛」と「神の救い」」（清泉女子大学キリスト教文化研究所年報）平成29・3）は、「おぎん」には、本作品執筆当時の芥川が『聖書』やキリスト教に関する外国の諸文献にいたるまで読みを広め、理解していたキリスト教の「隣人愛」の教えと、その愛に生きた存在に与えられる「神の救い」が描かれているが、もう一つのテーマとして、「キリスト教を知らず、キリスト教以外の他の宗教を信じている者たちは救われない、地獄に落ちる、とする当時の外国人宣教師たちの見解への疑問」が表されていると考えられる」と述べている。こうした読みがまず一般的な解釈であろう。その解釈では、女の底力の前における男の無力さという構図は、浮かび上がってこない。

(24) 例えば「極悪非道な心根をもつ女房と、健やかで純粋なバーソナリティをもつ権助の対比が明瞭で、女房に対する懲罰と報復ではなくて、丸く収まるところがコミカルなどんでん返しで爽やかでもあります。」（田中昌克によるサイト「SOPHART 日本文学について」平成29・9・23更新）という意見がある。こうした考え方が大方の解釈であろう。また例えば王書璋「仙人」論——大正四年から大正十一年の時間を読みみて」（『千葉大学社会科学文化科学研究』平成16・8）は、「主人公の権助は狡猾

な古孤（医者の女房）と正反對な「馬鹿正直」「愚者」ともいえる性格を持っている。これは「勞山道士」の王生と反對であり、權助の仙人になったポイントとなる。芥川もそういう意図を持っていると見えて、權助の「愚者」の性格をわざと誇張している」として、医者の妻を「狡猾な古孤」と規定している。

つまり、医者の妻を嘘つき、詐欺師の類と考えているのである。

- (25) 日置俊次「芥川龍之介「羅生門」論」（『青山語文』平成17・3）、および日置俊次「芥川龍之介「羅生門」論——下人の太刀について」（前掲）、日置俊次「芥川龍之介と『赤光』（久保田淳監修『和歌文学大系』赤光・林泉集）月報』明治書院、平成18・2）等を参照。

- (26) 中村光男「薺の中」から」（『すばる』昭和45・6）は、次のように指摘している。

「二人の男に恥を見せるのは、死ぬより辛い」から「どちらか一人死んでくれ」というのは、二夫に見えずの貞操観から出たようであり、その根底には、自分の生活の不快をとりのぞくために、他人の生命を奪うことを辞さない、本能的なエゴイズムをかくしています。これが多襄丸によれば、女性の本性なのであり、それに惹かれ、それに支配されるのが男性の運命でありまた生甲斐なのです。

女性に支配される男という指摘がここに見られる点は重要である。また、多襄丸の「たじよう」という音には「多情」が重

なるし、「襄丸」という読み入った漢字は一見すると「寧丸」という漢字に似ている。しかし、よほど肉欲的、衝動的、動物的な盜賊であるかと思わせておいて、彼は紳士的で正直な面も持っている。中村光男は「この紳士の盜賊は、作者自身の、とは云えなくとも、作者の思想のもつとも直接な分身でしょう」と述べている。もし多襄丸が芥川なら、芥川が心から奪いたかったが人妻になってしまった女性といえ、吉田彌生が思い浮かぶ。

- (27) 吉田彌生は陸軍中尉の金田一光男と結婚した。金田一は金澤武弘と名字の一字が重なる。偶然とは思えない。武弘の妻は眞砂という名だが、これはこまかい砂という意味である。盗人の物語で、眞砂だというと「石川や浜の眞砂は尽きるとも世に盗人の種は尽きまじ」という石川五右衛門の辞世と伝えられる歌を思い出す。石川といえ、石川県の金沢が連想される。こうした連想の中に金沢人である室生犀星夫妻や、その家の庭の竹、その隣家の園芸好きな金沢人広瀬雄などが重なり合っているのではないだろうか。また金澤眞砂という名前でも思い出すのは、東大の本郷キャンパスに近い眞砂町であり、それは赤門方面にある。芥川が彌生に失恋したのは、彼が東大在学中のことである。本郷の東大キャンパスは加賀藩の屋敷跡であり、まさに金沢の匂いがある場所である。眞砂町は、芥川の親友泉鏡花（金沢出身）の『婦系図』における恩師酒井先生の「眞砂町の先生」

という呼び名でも知られる。東大周辺には弥生という地名もあり、弥生門も存在する。眞砂という名は本郷に通っていた芥川の連想の輪の中に位置を占めていたであろう。なお、眞砂町は樋口一葉所縁の地でもある。一葉は浅黒かったといわれる。例えば星野天知は「窓際に二十四、五とも見える色の浅黒い、小さいけれども少し猪首な町屋娘が座っている。之が今日訪ねた女史である。其黒目勝ちの光りと反動的の覇氣とが先ず吾眼を射た」と述べており、車夫の以下の言葉も引用している。「貧乏世帯の引被って居るのだから無理も無いが、色が黒くて癖っ毛で、たが藪のようだぜ、それに立姿も佳く無いし、第一高慢ちきな様子だ」（星野天知「文学界と一葉女史」、引用は小池昌代解説『一葉のポルトレ』みすず書房、平成24・6より）。「九つ斗の時よりは、我身の一生の世の常にて終らむことなけかしく、あはれ、くれ竹の一ふしぬけ出しがなとぞあけくれに願ひける」（「藪の中」という志を持っていた色黒の一葉のイメージが、才女だった吉田彌生と重ねられ、眞砂の造形に影響を与えた可能性が考えられる。眞砂の描写をもう一度確認すると、「顔は色の浅黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜実顔」ということだが、森啓祐「大正三年の芥川龍之介——その初恋をめぐっての新事実」（『国文学解釈と教材の研究』昭和52・5）の中に昭和五年の彌生の写真が載っている。モノクロで小さいため、うりざね顔であることはわかるものの、肌の色やほくろ

については確認できない。同じく森啓祐「芥川龍之介と吉田彌生」（『国文学解釈と教材の研究』昭和45・11）に十八歳の彌生の写真が載っている。こちらにも不鮮明で、やはり肌の色やほくろは確認できない。「羅生門」の続編と呼ばれる「偷盗」には、自分の女としての魅力を利用し、したたかに生きる魔性の女、沙金が登場する。その沙金という名前も「金沢」を意識しているのではないか。金沢とは砂金が出る沢の意味である。金澤眞砂という名との共通点は明らかであろう。二人とも、例えばメリメの描いたカルメンのように、男たちを振り回す女である。今野喜和人「芥川龍之介と〈宿命の女〉——「藪の中」の眞砂像」（『比較文学』平成5・3）は、「カルメン直系の〈宿命の女〉で眞砂との関係もしばしば指摘される「偷盗」の沙金」は、「恐ろしい野性と異常な美しさとが、一つになった」顔をし、「狭い額とゆたかな頬と、鮮な歯と淫な唇と、鋭い眼と魔楊な眉と、——すべて、一つになり得そうもないものが、不思議にも一つになって」いた」と指摘し、「一人の女でありながら一人の女ではなく、絶えず内に変身の可能性を秘めた女——これは眞砂像を理解するためにも重要な特性ではなからうか」と述べている。また眞砂の容貌を分析し、「ただ芥川自身を悩ませ続けた現実の〈宿命の女〉で、「藪の中」の構想にも何らかの影を落としていたことがしばしば指摘される「狂人の娘」秀しげ子は、少なくとも顔の点で「皮膚のうすい頬の血色もすきとほつ」た

女性——瀧井孝作の証言）真砂とは隔たっているようである」と指摘している。芥川は「偷盗」は失敗作だと述べているが、男たちが結果的に沙金を殺した点に、芥川の意図とは違う物語が流れ込んでしまった可能性はある。したたかな沙金の「女の力」が雲散霧消してはいけないのではないか。またそれは犯罪者ではなく、市井で地味に生きている女性の「女の力」でなければならなかったのではあるまいか。なお、柳田國男が例の「妹の力」に触れるのは、「妹の力」（『婦人公論』大正15・10）においてであり、「藪の中」発表後のことである。芥川が早くから『遠野物語』に惹きつけられていたことは言うまでもない。

(28) これは作品とは直接関係がないが、昭和二年七月二十四日の朝、芥川は亡くなった。その死は当日の夜九時になって、自宅近くの貸席「竹むら」で発表され、手記が読み上げられた。田端の「竹むら」は文人御用達の店らしく、例えば昭和二年には、山村暮鳥忌第三回句会（昭2・12・6）が催され、室生犀星、久保田万太郎、前田夕暮、千家元麿、佐藤惣之助らが出席している。

(29) 「藪の中」については、つとに吉田精一が「当事者達の事実に対する迫り方、受けとり方が各種各様で、めいめいの関心、解釈、感情によって、単純な一つの事実が如何に種々の違った面貌を呈するかを、従って人生の真相が如何に把捉し得ぬものを語らうとしたのが、この作の主題と思われる」（『芥川龍之

介』新潮社、昭和33・1、一六七頁）と述べており、作品解釈の基本的な方向性を定めている。駒尺喜美「芥川龍之介「藪の中」（『解釈と鑑賞』昭和44・4）は、「第一の小テーマは、告白というものがいかに真実から遠いものかであり、第二の小テーマは、人間のエゴイズムというものはどのような状況にあってもぬぐい切れぬもの、否、極限状況であればあるほど一層露骨に、人間は自己の満足を中心におくかということである。この二つの小テーマが溶け合って、人生における真実・事実がいかにとらえ難いかの一つのテーマが奏でられているのである」という。首肯できる意見であるが、こうした解釈には、男の無力さと「女の力」というべき視点が存在していない。真砂のほかに、例えば巫女という存在に関して、そのうさんくささに注目する論も多くあり、たとえば澤西祐典は、「語り主にさえ疑念を抱かせる「巫女の口を借りたる死霊の物語」が最後に配された構造の本作は、読者をテクストの中で「中有の闇」に迷い込ませる（それゆえ無数の「読者の物語」が生まれ続けるわけだ）が、死によって断絶されるテクストとは異なって、読者は判断停止に陥ることなく、常に疑念を挟みつつも自らの読書行為／発話行為を刷新し続けてゆく必要がある」と指摘している（『藪の中』、庄司達也編『芥川龍之介ハンドブック』鼎書房、平成27・4所収）。